

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：32727

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2020～2023

課題番号：20K10788

研究課題名(和文) 精神疾患の親をもつ子ども同士の世代を超えたピアサポートの実践と可能性

研究課題名(英文) The practice and possibilities of transgenerational peer support for children with parents with mental illness

研究代表者

横山 恵子 (YOKOYAMA, KEIKO)

横浜創英大学・看護学部・教授

研究者番号：80320670

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、2018年に設立された「精神疾患の親をもつ子どもの会(こどもびあ)」の成人した子どもたちのリカバリーの経験から、ヤングケアラーである未成年の子どもたちへの効果的な支援の検討を目的とした。「こどもびあ」に参加経験のある人を対象に、小・中・高校学校時代のヤングケアラーとしての体験を調査した結果、支援には学校の教員の役割が重要であることが明らかになった。そこで、教員への理解を図る目的で、動画教材「私ここプログラム」を作成し、効果評価を行い論文とした。「こどもびあ」の全国の拠点は、新たに2カ所増え、東京、大阪、札幌、福岡、沖縄、岡山、高知の7カ所に広がった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

子ども版「家族学習会」経験者をコアグループとして設立された、「精神疾患の親をもつ子どもの会(こどもびあ)」は、誰にも話せず、社会で孤立する成人した子どもたちを繋ぎ、互いに語り合うことで、生きづらさからの回復を支援する役割を担っている。「こどもびあ」メンバーの体験は、ヤングケアラー支援のあり方を明らかにすることができるとともに、同じ立場の未成年の子どもたちへの世代を超えたピアサポートが可能となると考える。

研究成果の概要(英文)：This study is based on the recovery experiences of adult children of “KODOMO-PEER (an association for children, estab. in 2018, with mentally ill Parents) and its aim is to examine effective support for minor children who are young carers. As a result of the survey of the people (who had participated in “KODOMO-PEER”) of their own experiences as young carers in their elementary, middle, and high school years, it becomes clear that the role of school teachers is important for support. Therefore, in order to improve teachers’ understanding, we created a video teaching material called “WATASHI-KOKO PROGRAM,” evaluated it as a paper. Two more activity bases of “KODOMO-PEER” are added all over the country, and total activity bases reached seven. They are Tokyo, Osaka, Sapporo, Fukuoka, Okinawa, Okayama and Kochi.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神障害 精神障害者家族 子ども ヤングケアラー ピアサポート

1. 研究開始当初の背景

令和元年版障害者白書によると、日本における精神障害者数は419万人を超え、30人に1人は精神障害をかかえており、そのうち子どもを出産し育てる年代である20～65歳の精神障害者数は全体の54%と、精神障害の親とその子どもは相当数いることが推測できる。子どもの中で精神疾患を患う親をもつ子どもの割合は、オーストラリアでは23.3%、ドイツでは13～19%いると推測されているが、日本では明らかではない。さらに、精神障害を持つ親は、疾患による育児能力の低さや精神症状による児童虐待のハイリスクがあること、生まれた子どもが将来精神疾患を患う確率が高いことが明らかにされている。近年の抗精神病薬やリハビリテーションの進歩で、精神障害があっても結婚し、親になることが当たり前の時代になりつつある。しかし、子どもの実態は社会に知られておらず、子どもへの支援はほとんどなされていないのが現状である。

精神疾患の親をもつ子どもは、親の精神症状によって、周囲との関係性の阻害、親の離婚や失業による経済的な困難を抱えやすい。このような環境で生活している子ども自身も周囲に話せないことから、支援が受けられず、病気の親とともに孤立しがちである。その結果、子どもたちは、成人してもなお、周囲を信用できず相談できない等、「生きづらさ」を抱えている。

申請者は、子どもの立場の家族のグループを作るために、子ども版「家族による家族学習会(以下、家族学習会)」というピアサポートプログラムに着目し、子ども版家族学習会を開発してきた。家族学習会は家族自身のエンパワメントを目的に、親を中心とする精神障害者家族会が取り組み、全国26都道府県で実施し、延べ5000人が参加している。子ども版家族学習会は、2015年に初めて開催し、2019年までに延べ9クール実施し、20代から60代まで幅広い方々が参加してきた。

子ども版家族学習会を経験した子どもたちが運営メンバーとなり、2018年1月に「精神疾患の親をもつ子どもの会(こどもぴあ)」を正式に設立した。「こどもぴあ」のメンバーは、自分たちの体験を生かした世代を超えたピアサポートや、社会に向けて自身の体験を語る社会的活動を始めている。

2. 研究の目的

本研究は、設立された「こどもぴあ」で活動している、精神疾患の親をもつ成人した子どもたちのリカバリーの経験から、子ども自身の困難の受けとめや対処、子ども自身が望んでいる支援を明らかにし、未成年の子どもたちへの効果的な関わりや支援を検討する。さらに、その成果を「こどもぴあ」メンバーの体験を活かしたピアサポートとして、「精神に障害がある人の配偶者・パートナーの支援を考える会(以下、配偶者会)」との連携による、学童期以降の未成年の子ども支援、小中学校の教員を対象とした教材作りを行い、義務教育の時期にある子どもへの直接的支援を実施することを目的とする。

3. 研究の方法

(1)「精神疾患の親をもつ子どもの会(こどもぴあ)」に参加したことのある240人を対象とし、ウェブ上のアンケート調査を実施する。調査は、こどもぴあの運営メンバーと研究者が一緒になって計画し、「こどもぴあ」代表者よりEメールにて研究協力の文面を送り、ウェブ調査のURLを案内する。小・中・高校時代の体験、学校での相談状況、子どもの頃に認識した教員の反応、学校以外での援助などを質問する。分析は単純集計を行い、学校内外の相談歴について回答者の年代で比較する。自由記載は内容の抽象度をあげて質的に分類する。

(2)小中学校の教員を対象とした教材を「こどもぴあ」メンバーとともに作成する。教材には、精神疾患の基本的知識、子どもたちの体験談、関わり方等を盛り込む。連携の取れている地域の小中学校3校程度で、教員に動画を視聴してもらい、動画視聴後、教員へのアンケートを行う。効果評価を行う。

(3)子ども版「家族学習会」を継続的に開催し、コアメンバーを増やし、「こどもぴあ」を全国に普及する。地域での「こどもぴあ」立ち上げの希望があった際には、こどもぴあの運営メンバーが支援する。又、地域での家族学習会の開催を支援する。その際は、近い地域の「こどもぴあ」運営メンバーが担当する。

(4)配偶者会と連携し、学童期以降の未成年の子どもへのピアサポートを検討する。未成年の子どもグループを開催し、こどもぴあメンバーがグループを運営し、未成年の子どもを直接支援する。

4. 研究成果

(1) 子ども時代のヤングケアラーとしての実態の調査

240人を対象とし、120人から回答を得た(回答率50%)。年齢は20歳代から50歳以上まで幅広く、女性が85.8%だった。精神疾患をもつ親は、母親のみが多く67.5%であり、親の精神疾患推定発症年齢は、回答者が小学校に入るまでが73.1%だった。ヤングケアラーとしての役割

は、小・中・高校時代で親の情緒的ケアが最も多く 57.8～61.5%が経験し、手伝い以上の家事は 29.7～32.1%が経験していた。小学生の頃は 62.4%が大人同士の喧嘩を、51.4%が親からの攻撃を経験していた。周囲が問題に気づけるとするサインには、親が授業参観や保護者面談に来ない、いじめ、忘れ物が多い、遅刻欠席が多い、学業の停滞があった。しかし、サインは出していなかったとした人は小・中・高校時代で 43.2～55.0%であった。回答者が認識した教員の反応では、精神疾患に関する偏見や差別的な言動、プライバシーへの配慮不足などで嫌な思いをしていた。家庭の事情や悩みを気かけ、話を聞いて欲しかったという意見が多かった。学校への相談歴のなかった人は小学生の頃 91.7%、中学生の頃 84.5%、高校生の頃で 78.6% だった。相談しなかった理由としては、問題に気づかない、発信することに抵抗がある、相談する準備性がない、相談環境が不十分というものがあつた。相談しやすかった人は、すべての 時期で担任の先生が最も多かった。30 歳代以下の人は、40 歳代以上の人に比べて小学生や高校生の頃に学校への相談歴がある人が有意に多かった。

精神疾患のある親に育てられた子どもは、支援が必要な状況にありながら、周囲が気づくことも支援することも難しい子どもたちであった。子どものサインを見つけることは難しいものの、親が授業参観や保護者面談に来ない、いじめ、忘れ物が多い、遅刻欠席が多い、学業の停滞などは早期発見のポイントとして注意する必要がある。子どもたちを支援するためには、子ども自身が自分の負担に気づいてもらうことや、支援を受けてよいことをわかってもらうような働きかけも必要だと考える。精神疾患のある親に育てられる子どもの存在をマスメディア、SNS、書籍などで情報を発信するとともに、学校での広報活動も必要だと考える。学校では、教員への研修もあわせて必要だと考えられる。教員は、精神疾患の基礎知識だけでなく、精神疾患のある親に育てられる子どもの生活や困りごと、対応方法について学ぶ必要があると考えられた。この調査結果は、論文とした。

(2) 教員を対象とした、精神疾患の親をもつ子どもの啓発教材の作成

「こどもびあ」の調査から、学校の教員が、子どもたちにとって重要なキーパーソンであることがわかった。そこで、学校の教員を対象とした、精神疾患の親を持つ子どもをサポートするために、教員のトレーニングのための、e ラーニング プログラムを開発し、その有効性を明らかにした。この研究は、30 分間のビデオベースの e ラーニングプログラムであり、教員が精神疾患と精神疾患を持つ親を持つ子供についての基礎知識を習得し、サポートを必要とする子供を認識し、サポートする自信を身に付けることを支援するものである。学校は介入群とコントロール群にランダムに分け、学校の教員はプログラムに登録し、個別に参加してもらった。教員の結果指標は、ベースライン(T1)、事後 (T2)、1 か月後 (T3) の 3 つの時点で評価した。

対処困難感サブスケール(主要アウトカム指標)とともに、自己開発アウトカム指標が使用された(子どもを支援するための実際の行動と態度、知識、プログラム目標達成の自己評価)。すべてのアウトカム指標について、時間の経過に伴う有効性を評価した。プロセス評価の一環として、自由記述テキスト応答を定性的に分析した結果、このプログラムは、精神疾患を持つ親の子どもを支援する教員にとって効果的であった。調査結果は、英語論文とした。

この動画教材に関しては、ホームページ「私ここライブラリー」を作成し、そこにアップした。いつでも自由に閲覧できるようにしている。

(3) こどもびあの全国への広がり

こどもびあでは、コロナ禍の中、対面での開催が難しくなり、「子ども版家族学習会」と「集い」をオンラインで開催したことで、全国からの参加が可能となった。「子ども版家族学習会」は、2023 年度までにオンラインで 5 クール開催した。オンラインで繋がった地方のメンバーからは、自分の地域でも「こどもびあ」を上げたいという希望があり、こどもびあの運営メンバーとともに、地域での立ち上げを支援した。具体的には、2022 年 8 月に岡山にて、「岡山立ち上げオンラインセミナー」を開催、地域に支援者と子どもの立場の家族などが参加した。さらに、2024 年 3 月には、高知で、「高知こどもびあ立ち上げファースト」を、対面形式で開催、その状況は地元の新聞やテレビで紹介された。

しかし、地域での基盤を作るための家族学習会は、立ち上げた地域で開催するまでには至らなかった。コロナ禍で移動が制限されたこと、対面からオンラインとなり、コアメンバーの育成が難しかったことが理由である。

全国のこどもびあの拠点は、東京、大阪、札幌、福岡、沖縄、岡山、高知の 7 か所に広がった。2024 年 3 月には、全国の拠点の代表者が東京に集まって、全国会議を対面で開催し、今後の連携した活動を議論することができた。

(4) 配偶者会と連携した、未成年の子どもへの支援

配偶者会と連携しながら、学童期以降の未成年の子どもへのピアサポートを模索した。コロナ禍前は、配偶者会で親とともに訪れた子どもを対象とした、子どもグループを開催していた。子どもグループの対応は、こどもびあメンバーが担当し、グループによる話し合いだけでなく、一緒にホットケーキを焼くなど、レクリエーション活動を通しての交流も行うことができた。しかし、コロナ禍となり、配偶者会が会場での開催ができなくなり、オンラインに移行したことから、子どもグループの開催が難しくなった。引き続き、配偶者会と連携しながら、支援を模索しており、

今後の課題となっている。

国がヤングケアラー支援対策事業に取り組み始めたことから、「こどもぴあ」メンバーはヤングケアラー経験者として、国のアンケート調査やインタビューに協力してきた。市町村でのヤングケアラー研修に講師として呼ばれ、自らの体験を語る機会が増え、ヤングケアラー支援への当事者としての助言や参画も求められている。未成年の子どもたちへのピアサポートに関しては、「こどもぴあ」が市町村や地域の事業所と連携して実施することも、検討する必要があると考える。しかしながら、「こどもぴあ」メンバーは、自身の仕事や生活をもちながら、時間を作って活動している現状がある。今後は、メンバーの負担が過重にならずに活動できるよう、外部からの資金的支援や活動へのサポートが必要であると考えます。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 4件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 Kageyama Masako, Sakamoto Taku, Kobayashi Ayuna, Hiramata Akiko, Tamura Hiroyuki, Yokoyama Keiko	4. 巻 11
2. 論文標題 Childhood Adversities and Psychological Health of Adult Children of Parents with Mental Illness in Japan	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Healthcare	6. 最初と最後の頁 214 ~ 214
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3390/healthcare11020214	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Masako Kageyama, Atsunori atsushita, Ayuna Kobayashi, Taku Sakamoto, Yasuhiro Endo, Setsuko Sakae, Keiko Koide, Ryotaro Saita, Hiyuka Kosaka, Satoko Iga, Keiko Yokoyama	4. 巻 23(1)
2. 論文標題 Video-based e-learning program for schoolteachers to support children of parents with mental illness: a cluster randomized trial	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 BMC Public Health	6. 最初と最後の頁 1-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Masako Kageyama, Keiko Koide, Ryotaro Saita, Riho Iwasaki-Motegi, Kayo Ichihashi, Kiyotaka Nemoto, Setsuko Sakae, Keiko Yokoyama	4. 巻 21(1)
2. 論文標題 A randomized controlled study of an e-learning program (YURAIKU-PRO) for public health nurses to support parents with severe and persistent mental illness and their family members	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 BMC nursing	6. 最初と最後の頁 342-342
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1186/s12912-022-01129-0	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 37 (1)
2. 論文標題 精神障がい者家族のストレスとピアサポート	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ストレス科学	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 第233号
2. 論文標題 精神疾患の親をもつ子どもの経験と支援-「こどもびあ」と歩んで-	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 こころの科学	6. 最初と最後の頁 69 73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 49 (12)
2. 論文標題 精神障害をもつ親と子どもの傷つき	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 13-16
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 185
2. 論文標題 特集「家族まるごとって何ですか？」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 こころの元気+	6. 最初と最後の頁 4-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 陰山正子, 横山恵子, 坂本拓, 小林鮎奈, 平間安喜子	4. 巻 68 (2)
2. 論文標題 精神疾患のある親をもつ子どもの体験と学校での相談状況: 成人後の実態調査	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 公衆衛生雑誌	6. 最初と最後の頁 131-143
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11236/jph.20-036	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 44(6)
2. 論文標題 精神疾患の親をもつ子どもの困難とピアサポートの実際	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 小児看護	6. 最初と最後の頁 650-656
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 48(7)
2. 論文標題 ヤングケアラー当事者の困難	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 精神科看護	6. 最初と最後の頁 17-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 176号
2. 論文標題 特集「コロナ禍でも家族会」 家族会の今とこれから	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 月間みんなねっと	6. 最初と最後の頁 6-9
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 14(5)
2. 論文標題 リカバリーと共に時代を変える フォーラム文科会 第3回家族まるごと支援とリカバリー~それぞれの立場の困難とピアサポート~	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 コンボ元気+	6. 最初と最後の頁 50-51
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 横山恵子	4. 巻 161
2. 論文標題 特集「こどもびあ」 子どもの立場への支援	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 月間みんなねっと	6. 最初と最後の頁 16-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計6件 (うち招待講演 3件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 横山恵子
2. 発表標題 教育講演「精神疾患のある親に育てられた子どもたち」
3. 学会等名 第24回いのちの教育学会研究大会 (招待講演)
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横山恵子
2. 発表標題 シンポジウム：家族支援の現在地 家族による家族学習会とその目指すところ
3. 学会等名 第17回日本統合失調症学会
4. 発表年 2023年

1. 発表者名 横山恵子
2. 発表標題 教育講演 ヤングケアラーといわれる子どもたちへの支援 - 精神疾患の親をもつ子どもたちと歩んで -
3. 学会等名 埼玉県立大学保健医療福祉科学学会第12回学術集会 (招待講演)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 横山恵子
2. 発表標題 教育講演 「精神障がい者家族のストレスとピアサポート」
3. 学会等名 第37回日本ストレス学会学術総会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 伊賀聡子, 横山恵子, 森正樹, 森田牧子
2. 発表標題 精神疾患の母親をもつ子どものライフストーリー
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第31回学術集会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 木村 諭志, 横山 恵子, 森田 牧子
2. 発表標題 精神保健医療福祉の支援者となった統合失調症患者のきょうだいの体験
3. 学会等名 日本精神保健看護学会第31回学術集会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 新宿フレンズ役員会編著, 伊藤順一郎, 岩下覚, 横山恵子, 他	4. 発行年 2021年
2. 出版社 ラグーナ出版	5. 総ページ数 240
3. 書名 心の病気の回復は家族の学びから 新宿フレンズ50年の道のり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

私ココライブラリー

<https://kageyamaresearch.wixsite.com/watashikoko>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------